

中村桃子

『「女ことば」はつくられる』

ひつじ書房、二〇〇七年

れいのるず 秋 葉 か つ え

本書は、「言語学」の科学主義、記述文法主義や規範文

法に隠された女性差別的イデオロギーをフエミニズムの視

点から大胆に批判し、問題化してきた著者による新たなチ

ヤレンジである。著者は、冒頭で「女ことばとは何なのか」

と問いかける。そして、構築主義（本書では「構築主義・

イデオロギー的アプローチ」と名付けられている）にもと

づいて、日本社会において広く受け入れられているへ女の

言葉づかいへととしての「女ことば」を否定し、「女ことば」

を女性支配のために構築された「言語的ジェンダー・イデオロギー」と捉えることを提案する。あたかも「女ことば」が実体としてあるかのように「女ことば」について語る言説こそが女ことばイデオロギーを構築してきたのだ、という考え方に読者を導いていく。行為としての「言説」を研究対象にとりこむことによつて、日本語における性差の研究に学際的な視野を拓こうとする意気込みにあふれた作品である。

「女ことば」について語る言説のイデオロギー性について、

日本の女性たちの多くはかなり以前から気づいていたと思う。しかし、それがどういう形で顕われてくるのか、具体的に把握できていたとは限らない。実際の言説例をふんだんに引用して絵巻物のようにして綴られた本書主要部の歴史叙述には、*へなるほど、そうだったのか……*とあらためて納得させられる読者も少なくないだろう。その意味で、

本書は女性たちの意識を掘さぶる啓蒙書として意義深いと言えるかもしれない。哲学的な命題がびっしり詰まった序章は、ラディカルな構築主義が修正期に入っている現在、見直さなければならぬ重要な論点を含んでいるが、それは主要部と解きはぐしがたく絡み合っているわけではな

い。そこで、順序としては逆になるが、主要部の構成と物語りの進行をまず概観しておきたい。その後で、九〇年代後半の欧米フェミニズムの動向、日本のフェミニズム状況——とくに、「ジェンダー・フリー」問題——にも多少触れる形で、問題を提起しておきたい。

主要部は、四部からなり、それぞれが二章から教章に別けられ、章ごとにわかりやすい見出しがつけられている。

したがって、「目次」を読むと室町時代から現代までの「女ことばイデオロギー」の歴史的推移が一目で判るようになっている。

第一部「規範としての女の言葉づかい」は、日本の女性たちが知っていたことであり、議論の余地のない、わかりやすいテーマである。読者は、「女と言語の関係は近代のことば『の世界』に誘われる。鎌倉・室町時代の女訓書がはるか以前から語られてきた」という冒頭によって、「女は言葉づかいを『曖昧にして感情を表さない』『軽率にものを言わない』などと教える」次第に「女の言葉」「男の言葉」の区分を明確にしていた、という。

第二部「ジェンダーと『国語』——明治の国民国家成立と『女ことば』」は、四章立てになっている。著者がもつとも力を入れている部分であるように思われる。欧列列強の圧力を受けて開国し、遅れて資本主義的システムに参した日本にとつての最優先課題は、それまで各藩ごとに異なる言葉（お国ことば）によって生活していた人々の意識を統一して短期間で国民意識をつくり出すことであった。そのため必要とされたのが「国語」であり、国語の標準になったのが「中流社会の男子の言語」であったことは言う

までもない。下層社会の言葉、女たちの言葉は、日本語から整理・排除されていった。著者は、他の研究者の論考や小説家のコメント・作品からの引用をたぐり寄せて「女学生ことば」に照準を合わせ、女学生たちの「てよ・だわ言葉」がやがて「女ことば」として普及し、「国語」の外部に追いやられていったのだという解釈（あるいは仮説）を引き出している。「てよ・だわ言葉」は、「女が言語を使つて主体的にアイデンティティを表現しようとする行為」から生まれただのものであつたのにも関わらず、「セクシュアリテイに回収される」ことで「国語」の外部に位置づけられることになつてしまつた……と。

第三部は、「女の国民化と『国語』——近代総力戦の『女ことば』」。日本がアジア諸国を植民地化していく中で、国内における女の国民化が必要になつた。同時に、それまで国語から排除されてしまつていた女の言語が「国語」内部に取り入れられ、「正当な『国語』の中にはじめて位置づけられる」（二〇二頁）ことになつたという。「天皇制国家と家父長制家族の伝統が喪失・変化するこへの恐れ」の裏返し」（二六二頁）として「女ことばは日本の伝統だ」「日本文化の優位の象徴だ」「国語の守護者だ」と、「女こ

とば」を賞賛する言説が盛んに行なわれたことに注目している。

第四部は「女ことば」の脱政治化・本質化——『女らしさ』の戦後。戦後になつても、「女ことば」イデオロギ―は維持され、今も続いている、と著者は見る。戦戦直後には男女平等の立場から「女ことば」を批判する言説が登場したが、これに對抗して、本質論的な「女ことば＝女らしさ」言説が支配的になつた。「女ことば」は天皇制国家の伝統や大東亜共連語の優位の象徴という戦中の意味付けから切り離されて——脱政治化されて——「女らしさ」の自然な発露として再定義された結果だと言う。

主要部は、こうして、「女ことば」についての言説の歴史と政治・社会・経済の歴史を連動させて一つの物語りに仕立て上げられていると言える。添えられた挿絵も「物語り」効果を増幅する重要な要素になつている。「読者には、『女ことば』をイデオロギ―としてみなす視点から見えてくる新しい「女ことば」の世界を堪能していただければ幸いである」（二二頁）というような言葉の端々にも著者自身の「物語り」志向が含意されている。言語学的な専門

語も少なく、言説例の解釈部分に構築主義的な視線がなくはないが、それがテクストの表地に表れることは少ない。序章を飛ばして主要部分だけ読んで十分納得のいく運びになっている。日本のフエニズムに対する本書の貢献は、何よりもその物語りのな判りやすさと説得力であらう。

ところで、本書が序章で提案している「構築主義・イデオロギイ的アプローチ」についてはどうか。まず、「構築主義」とは何かが問題である。言語の形・意味・規範／文法というものが人々の生活環境や経験を通して構築されるものであるという程度の構築概念なら、言語と文化・認識についての仮説（「サビア・ウオーフの仮説」）や、チョムスキーの生成変形文法に対する批判として言語内部の多様性を主張してたちあげられた「社会言語学」の大前提である。それがなぜ九〇年代の言語と性差の研究で声高になつたのか。本書では、この「アプローチ」の知的源がどこにあるのか明らかに述べられていないが、脱構築戦略と背中合わせの極端な構築主義をうかがわせる論点が含まれている。一点だけ取りあげておきたい。第一に、女性たちが実際に使っている言葉つかいが多様であるという事実にも

とづいて、「女ことば」は「実際の言語行為の中に実体として観察できるもの」ではない（三一三頁）としている点。それならば、「日本語」や「関西弁」も、「女ことば」同様、実体のないカタゴリーだと言うことになる。極端な構築主義は、多くの社会言語学的な現象を分析不可能にし、研究すること自体を無意味にしてしまう。第二に、「本質主義においては、ジェンダーは言語行為が『原因』であつたが、構築主義においては、ジェンダーは言語行為の『結果』となる」と主張している点。「セクシヤル・ハラスメント」「セクハラ」という言葉を考えて見よう。この用語は、八〇年代後半から日本でも流通するようになった。おかげで、名前をもたなかつた問題——さまざまな性的嫌がらせ——について語ることが容易になった。現代日本の私的・公的言語空間に「セクハラ言説」は、あふれている。その形は様々であり、女性が男性に対して行なうことも稀にはあり、同性愛者間でも起こりうる。しかし、「セクハラ言説」以前にセクハラが存在しなかつたと言えるだろうか。ジュディース・バトラー（一九九〇）は、「セックス」と「ジェンダー」は独立したカタゴリーではない、「セックス」「ジェンダー」は文化的社会的に構築されるものだと、結果的に生

物理的性差の存在を否定したかのような印象を与えた——そう誤解されたとも言われる。固定化したジェンダー概念を描き起すためにひき起された「ジェンダー・トラブル」は、非白人女性やゲイ・レスビアンなどの「多様性」言説、第三世界のポストコロニアル言説と複雑に呼応して「理論戦争」を状況化していった。そうした中で、フェミニズム運動は「女」として権利や平等を求めていく政治運動の基盤を失って袋小路に追いこまれたと見られている。「セックス」というコトバが使えなくなり、「セクシュアリテイ」というコトバが多義的に行き交い、「ジェンダー」というコトバの意味が研究者たちにさえわからなくなった。一九九六年六月には「ジェンダー」の意味をめぐる国連が特別にミーンディングを召集したと言う。日本における「ジェンダー・フリー」問題も、そうした国際的に広がった「ジェンダー・トラブル」の局地的現象であつたと考えられな

いか。

一九九七年「言語と性差」研究の情報・意見交換誌 *Sexon & Language* (女と言語) が「ジェンダーを再考する」を特集した。寄せられた五十七篇から選ばれた十五篇の論文を読み返すと、ポスト構造主義がすでに反省期に入

つていたことがわかる。「わたしは、ゲイであり、トランスジェンダーである」と明かすジヨディ・ノートンは、妻の難産に立ち会つ中で自分が生物学的に男であることを強く実感したという。だから、「性差化された身体が社会的幻想の産物にすぎないと思ひこんで生きている——或は、死んでいく——ものは我々の中にはいない。そんな思い込みのなかで考えたり、しゃべったり、書いたりするのは、知的にナイーヴであり、倫理的に無責任である」と抗議し、脱構築戦略に女性嫌悪、ホモフォビア、トランスフォビアなどを矯正する力があつたことを認めながらも、「過度のポスト構造主義を再矯正する時」がきていると判断するのである。ヘフェミニズム理論家たちは、本来哲学用語である「本質主義」というコトバをほとんど蔑視的用語に変え、議論を二極化させたいという認識も一般的になつてきている。^③物質的^{マテリアル}でわかりやすかつた第二波フェミニズムを抽象的な文化フェミニズムにシフトさせるきっかけになつたとされるパトラーも、九〇年代後半には「性的差異はまるまる所与のものでもないし、まるまる構築されたものでもない」として過激な構築主義をはっきり否定している。現代を不確定性の時代ととらえるイリザライ(一九九三)に同

調しつつ「性的差異とは、生物学的なものが文化的なものにどう関わっているのかくり返し問い直すサイトなのだ」「ジェンダーだ、セクシエアリタイだ、人種だ、カルチュラル・スタディーズだと言って、特定の理論パラダイムや用語にしがみつくことには意味がない」と言う。「本質主義VS構築主義」というような相互排除的な思考を避けて、不確定性の時代のフェミニズムの可能性を探るための概念が次々に可視化してきている^(註5)。

「女ことばがある・ない」という問題は、九〇年代のはじめ日本女性学研究会で激しく論議された問題であった。結論は出ず、感情的なしこりを残して挫折したできごとであったように記憶している。わたしはこの論争の不毛さを指摘したことがある（『日本語学』五月臨時増刊号二八頁参照）。パトラー（二〇〇一b）の文体でいうなら、それは最終的な結論を出せる問ではないからだ。フェミニズム倫理に動機づけられた「女ことば」についての研究の多くは、「女ことば」があることを前提にしているのではなくて、「女ことば」はあるのかという当分は正解のない問いをくり返ししながら、性差について対話しようとしているのだと見ることもできる。そういう意味で、「女」「女こと

註

「ば」をフェミニズム研究からあらかじめ追放してしまうのではなく、多様な人々の、多様な場面での、多様な日本語使用における性的差異について問い続けていくことが、日本語と性差^{gender}研究の基盤を拡大していくことになるのだと思う。学際^{interdisciplinary}であること、包括^{inclusive}的／非排他的であること、それが、言語と性差研究の出発点であった。読者との、あるいは、他の研究者との対話を開く端緒となるとき、本書は、啓蒙書としてだけでなく、フェミニズム理論書としても生かされることになるだろう。

1 パトラー（2001a）は、構築主義にもいろいろあると述べ、「過度の構築主義は、ひどくエキセントラスな感じのときもある」と警告する。「構築という教義」とぞえ表現している。

2 Brofen and Kaye (2001) 参照。

3 Fuss (1989) など。

4 この部分の引用は、Butler 2001b からのものである。

5 「相差」(Finley & Norma, 1997), 「中間性」(Hanssen, 2001), 「重弁証法」(Moscovici, 2002) など。

- Butler, Judith. 1990. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York: Routledge.
- Butler, Judith. 2001a. "How can I deny that these hands and this body are mine?" (254-276) in Tom Cohen (et al.) *Material events: Paul de Man and the afterlife of theory*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- , 2001b. "The End of Sexual Difference?" Elisabeth Bronfen and Misha Kavka (eds.)(2001) *Feminist Consequences: Theory for the New Century*. New York: Columbia University Press. 414-34.
- Finley, J. Nancy & Rose L. Norman. 1997. The Concept of Parallax. *Women & Language*, Vol. XX, No. 1. 5-8.
- Fuss, Diana. 1989. *Essentially Speaking: Feminism, Nature, and Difference*. New York: Routledge.
- Hanssen, Beatrice. 2001. "Whatever happened to feminist theory" in Elisabeth Bronfen and Misha Kavka (eds.)(2001). 58-100.
- Ingaray, Luce. 1993. *An Ethics of Sexual Difference*, trans. Carolyn Burke and Gillian C. Gill. Ithaca, N.Y.: Cornell University Press.
- Moscovici, Claudia (ed.). 2002. *Double dialectics: Between Universalism and Relativism in Enlightenment and Postmodern Thought*. Oxford: Rowman & Littlefield.
- Norton, Jody. 1997. Body That Don't Matter: The Discursive Effacement of Sexual Difference. *Women & Language*, Vol. XX, No. 1. 24-30.